



津波の2時間後



校 門



震災後、自然に祭壇となった。

アッセンブリホール (多目的室)



教 室



元々は2学級で使用。学級減により壁を外し、半分に机を並べ、半分はワークスペースとして広々と使っていた。(1階は1・2年生)

中 庭



渡り廊下



体 育 館



野外ステージ



コンクリートの反響板は倒れている。
壁画にある「未来を拓く」は大川小の校歌のタイトル。



3.7km
海から大川小までの距離

1.1m
大川小の海拔



校門脇にあった碑、
海拔1m12とある

108名

当時の全校児童数
(校庭にいたのは77~8名と
言われている)

74名

犠牲になった児童数
(死亡70、行方不明4)
2021年6月現在

9度

毎年3月にシイタケ栽培の
体験学習を行っていた
大川小裏山の傾斜



10名

犠牲になった教職員数
(校庭にいた11人中)

51分

14:46(地震発生)から
15:37(津波到達)までの時間
津波で止まった時計



1分

津波から避難した時間
山ではなく川に向かった

8.6m

大川小を襲った津波の高さ
(海拔9.7m)



2階教室の天井に
津波の跡がある

150m

先頭の子が
避難開始から移動した距離

宮城県石巻市立大川小学校

1873(明治6)年 桃生郡釜谷小学校として開校
1985(昭和60)年 大川第一小学校と大川第二小学校が統合され
大川小学校となり、現在残されている校舎が完成
2011(平成23)年3月11日 東日本大震災の津波で被災
2018(平成30)年3月31日 閉校

2021.6

町がありました
生活がありました
いのちがありました
子どもたちが
学び遊びました

大川小にお越しの皆様へ

ここは多くの命が波に飲まれていった場所です。
悲しみ、後悔、恐怖が渦巻く場所です。

でも、できれば多くの皆さんに向き合ってほしい場所です。

大好きな大川、大好きな大川小学校を走り回る
子どもたちをイメージしてください。目を凝らし、
耳を澄ませば、見えてきます、聞こえてきます。

失われた輝きを伝えるのは、時間が経つほどに
難しくなりますが、とても大切なことでもあります。
慰霊も検証も防災もそこが始まりです。
伝え続けることで、思い出も命も輝き続けます。



大川伝承の会

facebook.com/ookawadensyo/



小さな命の意味を考える会

311chiisanainochi.org



English

311chiisanainochi.org/?page_id=3379



2011年3月11日 14時46分から15時37分まで

学校管理下に 70数名の児童 11名の教員

14:46 地震発生 14:52 大津波警報 15:37 津波到達

14:46 地震発生 震度6 約3分間

校庭避難 校舎から出る際、先生が「津波が来る山に逃げるぞ」と声をかけ、山に向かった児童もいたが、まずは整列することになった。

14:52 大津波警報 かつてない緊迫した警報。スクールバスには会社から「子どもを乗せて避難」という無線が入り、すぐ出られるように待機していた。

15:00頃 地域の人や迎えに来た保護者が山への避難を進言。子どもたちも「山に逃げよう」と訴えた。

15:25~30 市の広報車が高台避難を呼びかけ通過。

15:32 津波が堤防を越流。

15:36 移動開始 山ではなく三角地帯（橋のたもと）へ向かった。民家裏の細い道を通ったが行き止りだった。

15:37 学校に津波到達 橋に流木やがれきが堆積し一気にあふれた。その後、陸を遡上した津波も到達し、校庭で渦を巻いた。



■ 命を救う方法は十分あった。

体育館裏の山は傾斜が緩く、低学年でも容易に登れます。シイタケ栽培の体験学習も行われていました。5分あれば入釜谷方面へ向かい、植樹を行っていた山（バットの森）への避難も可能。地震による倒木はなく、スクールバスも方向転換を済ませ待機していました。

■ 校庭に避難し点呼。津波到達直前まで待機。

子どもたちは泣き出すなど不安がっていましたが、校庭待機が続き、たき火の準備も始まっていました。引き渡しの対応に追われていたわけではありません。（人数的にも多くない）



校庭脇の山 崩れないように土留めをし、コンクリートのテラスのようにになっている(5~6m幅で70m以上)。低学年の授業でも使っていた。校長先生はここから何度も写真を撮影。



体育館裏の山 2009年まで毎年3月にシイタケ栽培の体験学習が行われていた。

バットの森 全校児童でアオダモの木を植えた



せき止めた分、津波の威力、高さは大きくなった。橋は約4分の1が流失、堤防も決壊した。



2階の教室

ガレキに埋もれた校舎

■ 事前防災の大切さ

「2003年からの30年以内に99%以上の確率で大地震と津波が発生」という県の想定をうけ、市教育委員会は各校に防災体制の見直しを再三にわたり指示しました。

大川小のマニュアルには「近隣の空き地・公園に避難」と書いてありましたが、近くには空き地も公園もありません。避難の遅れに結びついたのは明らかです。教育委員会も提出されたマニュアルの点検・指導をしていませんでした。せっかくの想定が命を守る対策につながらなかったのです。裁判（2018.4判決）で問われたのはまさにこの部分です。

■ 自分ごとのできるかどうか

多くの学校は、津波到達のだいぶ前、あるいは結果的に津波が到達しなくても、念のために避難しました。一方で、備えが不十分で避難しなかったが、津波が到達しなかったので助かったという学校も少なくありません。だから「備えがずさんだった」だけで済ませるべきではありません。なぜそうなったのかを自分に置き換えられるかどうか。特別な場所で起きた特別な出来事ではないのです。

■ 命を真ん中に

学区内に海があり、川のそばに建っている学校のマニュアルに具体的な避難場所を一行書き込むために必要なことはなんでしょう。そんなに複雑なことでしょうか。報告書や通達が増えるだけでは本末転倒です。それらは時に命を見えなくします。本当に恐ろしいのは津波ではなく、大事なものを真ん中にできないことです。同じようなことが私たちの周りにはないでしょうか。

じっとしゃがんでいた校庭はどんなに寒くて、怖かったでしょう。黒い津波を見たとき何を思ったでしょう。事実に向き合うことは容易ではありません。

しかし、多くの皆さんがここに足を運びます。祈り、考え、掃除をし、花を植え、こうして震災遺構として整備されました。これからも集い学ぶ大切な場所であり続けますように。

